

2024(令和6)年は西区制80周年

知ってる?

西区のむかし

西区文化協会は1981(昭和56)年の創立。創作・芸能・茶道部門に分かれて活動しており、誰でも加入できます。「にしぶんか」は創立から5年後に発刊されました。西区に密着した文化と歴史、地域に隠された趣あるエピソードを交えて、温故知新を語り継ぐ広報誌です。地域振興課(区役所4階48番窓口)でお渡しています。



2024(令和6)年に西区は80周年を迎えます。これを記念して、西区文化協会が発行している広報誌「にしぶんか」から、これまでの西区の歴史をひも解いていきます。ぜひ西区のむかしに思いをはせてみてください。

第9回

ありしまたけお
有島武郎

にしぶんか No.36 から

有島武郎(1879～1923年)は西区老松町の税関宿舎で育ちました。山手の英和学院に通った経験を背景に書かれた短編小説が「一房の葡萄」です。主人公の「僕」は、登下校の際に目にしていた海と喫水線の赤い外国船を絵にしたいと思っていました。しかし、「僕」の持っている粗悪な絵の具ではその色を表現できません。そして外国人同級生が持っていた西洋絵具のうちの、海の濃紺と喫水線の赤の2色の絵の具が無性に欲しくなってしまう。教室が空っぽになった時、その2色を自分のポケットに入れてしまいます。事件はすぐに発覚しました。少年の苦悩、それを優しく包んでくれる若い女教師との心の交流をみずみずしい感性で描いた短編小説「一房の葡萄」は、その後何度か教科書に採用されました。

これとよく似た短編「少年の日の思い出」(1931年発表)をドイツの作家ヘルマン・ヘッセ(1877～1962年)が書いています。

ヘッセは武郎の作品を知る機会は無かったと思われるので、独立して書かれたのでしょう。少年の罪と後悔、そしてその救いは普遍的なテーマなのかもしれません。

武郎の二人の弟、生馬^{いぐま}と里見^{さとみ}^{とん}もそれぞれ画家、作家として活躍しました。

武郎の他の代表作:「或る女」「生れ出る悩み」など



絵 石黒繁夫